

「スリランカにおける宗教の受容と変容」に
関する研究ノート
—— シンハラ仏教と神霊信仰との関係を中心にして ——

嵩 満 也*

**NOTES ON ADOPTION AND ADAPTATION
OF AN IMPORTED RELIGION IN SRI LANKA**
— Focusing on the relationship between Sinhala Buddhism
and Indigenous Religions in Sri Lanka —

Mitsuya Dake*

The island of Sri Lanka is located at the south-east of Indian subcontinent. In Sri Lanka, Buddhism is the most popular religion, but as is she also called the museum of religions, there are various kinds of religions including Hinduism, Moslim and Christianity. In this notes, I would like to analyze the characteristic of adoption and adaptation of an imported religion, that is to say Buddhism, in Sri Lanka. Especially I would put my focus upon the relationship between Sinhala Buddhism and indigenous religions in Sri Lanka. Addition to that, I would like to make some comparison between the relationship of Buddhism and indigenous religions in Sri Lanka and that of Japan. This is a preliminary notes for further study.

はじめに

「インド洋の真珠」とも称されるスリランカは、インド亜大陸の東南端に位置する小さな島国である。人口約1901万人（2002年統計）の81.9%を占めるシンハラ人の大部分は仏教徒（全人口の76.7%）であり、スリランカの宗教というと仏教という印象が強い。しかし、実際には古くから現在に至るまでスリランカには多様な宗教が存在してきた。たとえば仏教以外にも、古代よりシンハラ人とともにスリランカに住んできたタミール人の多くが信仰する宗教であるヒンドゥー教（全人口の7.9%）や、インド洋を舞台に活躍したアラビアの商人や対岸の南インドの商人たちが伝えたイスラーム教（同8.5%）、さらには16世紀に始まるポルトガル、オランダそしてイギリスによる植民地統治の中で伝えられたキリスト教（同7.0%）に加えて、土着のさまざまな神霊をまつる民間信仰がスリランカの社会の中で共存している。このようなスリランカ社会における宗教多元状況は、独特なスリランカの宗教文化を生み出しており、宗教学ばかりでなく文化人類学・社会学等の研究者に格好の研究対象を提供している。

* 龍谷大学国際文化学部

この報告では、現在でもスリランカ人の社会の中で大きな影響力を持っているシンハラ仏教¹⁾と、仏教とともにその社会の中で広く浸透している神霊信仰を中心とした民間信仰との関わりに焦点を当て、もともと外来の宗教として伝えられた仏教のスリランカ社会における受容と変容について考えてみたい。ただ内容的に、紙幅の関係もあり、概説的なものにとどまることを最初に断っておきたい。

1 シンハラ仏教の歴史とその特色

スリランカへの仏教伝来は、インド以外の地域としては最も古く、ティッサ王（紀元前250～210在位）の時代に、インド・マウリア王朝のアショカ王（紀元前268頃～232頃在位）が息子のマヒンダをスリランカに送ったことまで遡る。ティッサ王は都のアヌラダープラに最初の寺院である、マハ・ヴィーラを建て、その後、歴代の王たちは仏教を厚く保護し、アバヤ王（紀元前89～77在位）の時代には、それまで口誦されてきた仏陀の教えを、パーリ語のテキストとして編纂した。言うまでもなく、このパーリ仏典が、仏陀の教えを現在に伝える最も古い経典である。

その後も仏教は大いに栄え、5世紀にスリランカを訪れた中国僧法顕は『仏国記』の中で、当時の代表的な寺院であったアバヤギリ・ヴィハーラには5千人の比丘がいたと書き記している。また、このころ南インドからスリランカにやってきたブッダゴーサは、『清浄道論』を著して上座部仏教の教説を大成した。この書は、現在でもスリランカのみならず、東南アジア（大乘仏教国であるヴェトナムを除く）に広がっている仏教の基本的な教説をなしている。

しかし、ブッダゴーサが活躍した後にも、新たにインドより密教が伝えられたものの、スリランカの仏教はシンハラ王朝が衰退したこともあり、停滞の時期を迎える。特に11世紀はじめに都のアヌラダープラが、南インドのチョーラ朝の侵入によって壊滅的な打撃を受け、戒律を保つ比丘が一人もいなくなったことにより滅亡の危機に陥った。しかし、11世紀後半にチョーラ朝をスリランカから駆逐した、ヴィジャヤバーフ王（1055～1110在位）の時代には比丘教団の復興がはかられ、かつてスリランカから仏教を伝えたビルマから比丘が招請された。12世紀半ばの王パラッカマバーフ1世（1153～1186在位）は、国王の権威と仏教の権威を結びつけ、仏教を保護すると同時に、比丘集団に対しては戒律を厳格に守らせることにより教団の綱紀を保ち、再び仏教は人々の尊敬と信仰を集めるようになった。また、この時代に仏教は広く民衆の間に広まり、ピリット儀礼（護呪経典を読誦する儀式）やスリランカ各地の聖地への巡礼（たとえば、スリ・パーダ信仰）が盛んに行われるようになった。

16世紀以降になると、ヨーロッパのポルトガル・オランダそしてイギリスによる植民地支配のもとで、仏教はさまざまな弾圧を受けたが、人々の信仰は脈々と受け継がれた。ところが、1701年には、弾圧と僧侶の墮落により再び比丘集団が消滅し、「ガニンナーンセ」と呼ばれる在家の者が、比丘の代わりの役目をする中で仏教が守られた。しかし、そのおよそ50年後に、今度はタイから戒律を伝えることが可能な比丘が招請され、再び比丘集団が復活した。現在のシンハラ仏教の主流は、このタイ仏教の伝統を受け継ぐ流れで、シャム派と呼ばれている。このような植民地支配による苦難の中で、1873年に行われた仏教とキリスト教との公開論争（パーナドゥラ論争）において、シンハラ僧グナーナンドが勝利を収めたことは、当時の仏教徒たちに大きな誇りと自信を与え、長い植民地支配の中で抑圧されてきたシンハラ人の民族意識を高揚する一方で、欧米人の中に仏教へ

の関心を高めることにもなった。特に、アメリカにいたロシア人のブラヴァツキー夫人とアメリカのオルコット大佐はスリランカ仏教の外護者となり、仏教徒の子弟の教育や欧米における仏教の普及に貢献した。現代スリランカ仏教復興の父とも称されるダンマパーラ（1864～1933）も、このブラヴァツキー夫人らの神智学会の運動に共鳴をして活発な活動を行い、1889年に当時アジアにおいて唯一近代化を成し遂げた日本の仏教徒と連帯するために、オルコット大佐とともに来日した。

1948年に独立をしたスリランカは、社会主義国共和国として再出発したが、仏教信仰はシンハラ人の大きな精神的な支柱となった。ただ、植民地支配がもたらしたさまざまな負の遺産とも言える、シンハラ・ナショナリズムと結びついた仏教僧の活動の中で、次第に民族対立の対立軸として宗教（仏教とヒンドゥー教）や民族問題がクローズアップされるようになってきた。もともとスリランカは、歴史的にさまざまな民族や宗教が一つの社会の中で比較的平和裏に共存してきた社会であったが、独立後は民族問題や宗教問題が社会的な問題となった。その背景には、多数派でありながら、イギリス統治下では少数派のタミール人が優遇されたため、疎外され続けたシンハラ人の被抑圧感情も大きく影を落としている。

2 シンハラ仏教における受容と変容

スリランカ仏教は、その長い歴史と伝統により、仏教全体の中でも多くの尊敬を集めているが、教えがシンハラ人の社会に浸透していく過程において、早くから土着の神霊信仰との習合が見られることも事実である。

概して仏教という宗教は、異なる宗教に対して比較的寛容な宗教である。異質な性格を持った宗教や思想であっても、それをただちに否定するのではなく、自らの思想のなかに取り込み、それを仏教的に解釈することにより、それらの存在する場所を与える。すなわち、直接対決するよりも融和的な態度を取ることで、現実存在する対立を解決しようとする場合が多い。また、このことは歴史的に見て、仏教がさまざまな地域に広がる過程において、その伝播がほとんど平和裏に行われてきたこととも無関係ではない。

しかし、そのような融和的な態度はまた別の面を持っていることも事実である。すなわち、そのことにより、民族や地域をこえた仏教の伝播が比較的スムーズに行われることになった反面、伝播後の仏教の思想的・文化的な変容の幅が、民族や地域によりちがいがみられるようになったのである。

たとえば、スリランカを旅行すると、至るところに神々をまつる祠が存在している。それはちょうど、日本の路傍で見られる地蔵や大日如来あるいは道祖神のような存在である。中には、ヒンドゥー教に起源を持つ有力な神の祠もあるが、名前も由来も分からない名も無き神の祠もある。そして、その祠を守っているのは、ヒンドゥー教徒である場合もあるが、仏教徒である場合も多い。また、仏教徒がヒンドゥー教の寺院に参拝をすることもスリランカでは珍しいことではない。

さらに、現在仏教寺院の大半には、境内地にデーワレーと呼ばれる神をまつる祠が付設されている。仏教徒は、寺院に出かけると、まず仏塔に礼拝し、次に菩提樹そして仏像が安置している本堂という順に参詣するが、その後何の抵抗もなくデーワレーにも参詣している。

一般住居においても、仏陀の像だけでなく、屋敷内にアイヤナーヤカ神と呼ばれる屋敷神をまつる祠を建てている場合が多く、日常生活の場でも両者は共存している。

明らかにこれは、仏教とヒンドゥー教、さらには民間信仰との間に成り立っている重層信仰の例だと言える。けれども、少し詳しく見ていくと、それぞれの信仰が全くごちゃ混ぜに存在しているわけではないことが分かる。少なくとも、意識的に機能分化が行われた上で、相互の関係が理解されている。

たとえば今回の現地調査の中で、コロombo市中の三輪タクシーの運転手数名に、「仏教を信仰することによりどのような意味があるか」と尋ねたところ、誰一人として現世利己的な目的を答える者はなかった。そこで、お願い事はどうするのかと尋ねると、異口同音に「それは仏陀ではなく、神様をお願いをする」というものであった。このことは、シンハラ仏教徒の重層信仰的な側面を示すと同時に、その信仰の中では役割分担のような形で機能分化が行われていること端的に示している。

従って、この点において、同じく重層信仰的性格を持っている、日本人の場合とは異なる面を持っている。日本人の場合、それほど「神」と「仏」との間に機能的なちがいを見ないからである。

それに対して、スリランカにおいては、「神」と「仏」との間に機能的なちがいを見るばかりでなく、序列的な関係において両者の関係を捉えている。両者の関係の中では、仏陀は輪廻を超越した存在として、常に上位としてとらえられるのである。

すなわち、悟りや涅槃につながる関係と、現実の欲求の充足につながる関係とが明確に区別される一方、それぞれにかかわる神的存在が、仏陀を頂点とする序列の中で理解されている。たとえば、仏陀の下に、シンハラ人にとっての四大守護神であるターナ神、ビシュヌ神、カタラガマ神、パッティーニ神²⁾、そしてその下に地域の神々、村の神々、悪鬼・悪霊が位置づけられ、そのことの中で重層信仰が成り立っている。また、その序列に応じて、儀式を執行する僧侶や霊媒などの社会的な階層も成り立っている。

このように、仏と神の関係を、1) 機能的分化と2) 序列的關係において理解するところに、スリランカにおける仏教の受容と変容に見られる特色を指摘できる。

3 シンハラ仏教と神霊信仰—日本の場合との比較を視野に入れつつ

では、シンハラ仏教のどのような点に、神霊信仰との結びつきを与える思想基盤があるのだろうか。

まず、出家と在家の区別が明確であるという点があげられる。一見、このことは、神霊信仰との結びつきとは無関係のようにも思われる。しかし、この厳格な区別が、かえって在家集団における仏教信仰と神霊信仰との機能的分化を成り立たせているとも言える。すなわち、この区別は、悟りや涅槃をえることができるのは、戒律を守り、比丘集団に属している僧侶だけであり、在家の信者は、教団や僧侶という功德を生む田畑（福田）に対して、布施の行為を行うことでその功德を得ることができるという思想の上に成り立っている。このような福田思想は、あくまで悟りや涅槃という仏教における究極的な価値を目的にしたもので、日常生活の中での直接的な現世利益とは明確に区別されている。その点を、補うのが神霊信仰である。出家と在家との厳格な区別が、出家仏教がカバーしない部分を補完するかたちで重層する余地を与えている。そして、両者を結びつける思想的根拠は、福田思想の根底にある回向思想にあると言える。

上座部仏教では、出家者の修行は、「戒・定・慧」の三学により、諸行無常、諸法無我、一切皆苦の真理を悟り、涅槃を得るという構造を持つ。それに対して、在家者の信仰は、因果応報・六道輪廻の思想を基本にしており、その中で、人間と神々や阿修羅、畜生、餓鬼、地獄との関係をつな

ぐものとして、福田思想や回向思想が説かれる。回向思想とは、本来さまざまな功德を悟りのためにふり向けることであるが、在家者の場合、出家者という福田を通して功德を得て、それをふり向ける。それと同じ構造が神霊信仰にも見られる。神霊を人間がまつことにより、その功德をその人間が得られるのである。つまり、出家者と在家者との間に成り立つ関係が、同様に人間と神々あるいは神霊との関係においても認められるのである。

しかし、ここで注意されなければならないことは、たいていの場合それが同一の次元では考えられていないということである。先の三輪タクシーの運転のように、来世以降の悟りや涅槃につながる関係と、現実の欲求の充足につながる関係とは明確に区別される。この点は、両者のちがいが必ずしも明確に意識されない日本における仏教と神道との関係とは異なっている。

また、そのような神霊信仰は、先に述べたように、仏陀を頂点とする宗教的權威の序列の中で理解されることにより、仏教信仰と重層しているのである。従って、シンハラ仏教の中で成立している重層信仰は、11世紀頃より密教の影響を受けつつ成立する本地垂迹思想のように、仏や菩薩と土着の神々とを同一視するものとは異質な面を持っている。そのように仏や菩薩と神霊を直接結びつけるのではなく、むしろちがいを認めながら、棲み分けをすることにより、長い間共存してきたとも言える。

その点では、奈良時代に見られる四天王などの護法善神の思想や、日本の土着の神々が、仏の教えを聞くことにより悟りを願うという形で展開する神仏習合思想がそれに近い思想構造を持つとも言える。

また、仏教思想の受容と変容の比較という点で興味を引くのは、日本とスリランカにおいて、仏教が土着の神霊信仰と重層する場合の共通点と相違点である。

まず共通点としては、日本とスリランカは地理的にも文明論的にもよく似た地位にあることが指摘できる。いずれも、大きな大陸のそばにある島国であり、その大陸では古代文明が栄え、両者ともその大きな影響下にあった。また、社会的にはいずれも稲作農耕を基盤とした社会であり、稲作農耕社会と密接な関係を持った文化の上に仏教が受容された点も共通である。

しかし同時に、仏教と土着の神霊信仰との関係においては、相違点がいくつか指摘できる。たとえば、日本の神仏習合においては、土着の神霊をまつる神社の中に仏像をまつる神宮寺が設置されたのに対して、スリランカでは仏教寺院内に神霊をまつる祠が建てられている。一方日本では、そのような神仏習合思想が、さらに本地垂迹思想へと発展することにより、仏や菩薩と土着の神霊が同一視されるようになっていくのに対して、スリランカではあくまで両者は明確に分けられてきた。なぜ、そのようなちがいが生まれたのか。その点については、今後の課題としたい。

また、今後の課題として今ひとつ上げるとするならば、現在スリランカの都市部で流行している、仏教信仰と神霊信仰が習合した信仰が、どのような現在のスリランカ社会の変化を背景にして起きているのかという点である。特に、そのことを成り立たせている思想基盤として、果たして先に述べたようなシンハラ仏教の理解がそのまま当てはまるのかという点は、大いに興味を引くところでありこの点についても今後の課題としたい。

注

- 1) ここでは、紀元前3世紀に伝えられたスリランカの仏教が、2000年以上の歴史の中で、シンハラ人社会に受容され、土着の民間信仰やヒンドゥー教などの諸宗教と交流する中で形成された仏教という意味でシンハラ仏教という言葉を用いている。
- 2) これらの守護神については、必ずしも一定しておらず、ビシュヌ神以外の三神は歴史的に変化している。すなわち、ビシュヌ神以外は、ナータ神、パティーナ神、サマン神、ヴィビーシャナ神、カタラガマ神という五神の中の三神の組み合わせである。

参考文献

- 杉本良男編『スリランカ』河出書房新書 1998
- M. M. J. Marasinghe, *Gods in Early Buddhism*, The University of Sri Lanka, Vidyalkara Campus Press, 1974
- Anuradha Seneviratna, *Ancient Anuradhapura*, The Department of Archaeological Survey, Government of Sri Lanka, 1994
- Richard Gombrich & Gananath Obeyesekere, *Buddhism Transformed—Religious Change in Sri Lanka*, Princeton University Press, 1988
- Ghandra R. de Silva, *Sri Lanka—A History*, Vikas Publishing House, 1987
- 義江彰夫著『神仏習合』岩波新書453 1996
- 『仏教文化事典』佼成出版社 1989